

「COLONOSCOPY

Diagnosis and Treatment of Colonic Diseases」

新 谷 弘 実 著

Chief of Surgical Endoscopy Unit, Beth Israel Medical
Center, New York
Clinical Professor of Surgery, Mount Sinai School of
Medicine, New York

愛知県がんセンター第1内科

小 林 世 美

Dr. Shinya が colonoscopy の本を書く計画を持っていることを知ったのは、もう5～6年前のことだったと思う。医学書院からの電話で、Dr. Shinya について尋ねられたのは、ある朝の外來診察中であつたことを今も覚えている。それから長い間、この本の出版を待ちこがれていたのは私だけではないと思う。今や名実共に世界一の colonoscopist である彼について改めて紹介する必要はなかろう。私が彼に初めて会ったのは1969年、ワシントンのアメリカ消化器病学会のときで、彼がポリペクトミーを始める前のことだった。以後年に平均4,000件の colonoscopy を行うとのことで、12年余りで約5万件を数えることになり、ポリペクトミーも既に1万例を大きく上回ったと聞いている。彼のテクニックに初めてお目にかかったのは、

まだ最近のことで、1979年ニューヨークを訪れたときである。他人のテクニックをほとんど見たことのない私にとって、それはすばらしい体験であつた。スコープを操る彼の両手の動きは、名曲を奏でる名ヴァイオリニストの動きに似ていた。天賦の才だけでなく、それにも増して彼の人並みならぬ努力が偲ばれた。アメリカで外国人が生き抜くためには、彼らを凌駕し、圧倒する強い精神力と逞しさ、それにたゆまぬ努力が必要である。Dr. Shinya は、まさにその類の人である。

この本は colonoscopist としての新しい技術の開発、そして豊富な経験に基づいた診断学、治療学の完成編である。特にポリペクトミーの開発者として、安全な技術開発や合併症に対する処置など実地の学問を展開している。30頁にわたる “Insertion

Technique” の記載のほとんどは、彼のオリジナルのものだ。中でも “Pull-Back and Rotation Technique” と “Right Turn Shortening Technique” を熟読されたい。私もこれらのテクニックを見学し、後に応用するようになってから、スコープの深部挿入が随分容易になり、検査が実に楽しくなった。疾患の項では、欧米に多い大腸憩室や炎症性大腸疾患などに関して詳述されている。 “Neoplastic polypoid lesion” の章は、この本のもう1つの目玉で、ポリペクトミーで得られたポリープを材料に、彼の大腸腫瘍学が46頁にわたり展開されている。アメリカの厳しい臨床トレーニングを経験してきた外科医であるだけに、ポリペクトミー後の癌の取り扱い、あるいは合併症に対する処置、術後の follow-up などについての考え方の基礎にある合理的な姿勢には、一内視鏡学者を超越するものが感じられる。とにかく、世界の第一人者として、いかにも頼りになる自信にあふれた記載が随所にみられ、心強い。単なる技術論だけでなく、洗練された外科医の深い内視鏡哲学をこの名著から読み取れば、この道でのより一層の進歩を授けてくれることは間違いない。

B 5 判 256 頁 図 27 写真 55 原色図 194
色図 19 1982 年 ¥ 17,000 円 300

医学書院 刊